定例活動／４月２２日(土)
「２００６年度総会＆竹林管理」

大舘　学

例年４月はコミセンで総会を開催し、余った時間で森の散策や点検などをしていましたが、「気候のよい新緑の時期に森の管理活動をしないのはもったいないね。」との意見から、今年はまず作業をやってから後半にオアシスの森で総会という運びとなりました。

森は新芽の緑が鮮やかで、ミツバツツジは満開、おたまじゃくしの泳ぐトンボ池の脇にはカラタチの白い花にハナアブが舞う生き物の森、自然の豊かさを堪能できるよい季節です。

天気にも恵まれたこの日の作業は、山根口近くの竹林が斜面を登り南側の雑木林に侵入するのを防ぐ目的で、主に斜面地での竹の間引き作業を10数名で取り組みました。時節柄所々にモウソウの立派な筍が頭を出していましたが、数は少なく、竹林の手入れの不足を感じました。

切った竹は長さ２ｍ位に切りそろえ近くに設置された「ご自由にお持ち帰りくださいコーナー」へ運びました。すぐに数組の親子がその竹を持って帰り、自然の産物に対する需要が結構あるものだと実感しました。

午前午後あわせて３時間以上の活動で、部分的ではあるがかなりすっきりした風景となり、作業の達成感を味わうことができました。

▲竹林管理の作業のようす

《２００６年度総会》

２時半過ぎから炭焼きの横のウッドデッキに場所を移し総会を開催しました。途中で帰った人を含めて総勢22人の参加の下で議事は進められました。

まず2005年度の活動報告と決算が承認され、2006年度活動計画と予算に移りました。今年度は花博協会からの「雑木林塾」活動への助成が予算の中の大半を占めることもあり、その内容についての質疑が多くなされました。さらに今回総会の特別議題でもある「緑のまちづくり活動に関する協定」（案）についての会員意見の集約に１時間以上の時間をかけ熱心な討議が続けられました。気がつけば４時を回っており暖かだった一日も終わりを迎えました。

▲青空の下で、総会を開催。

役員体制については３年で改選という暗黙のルールからあと１年現行のままでいくこととなり、以下の方に引き続きお願いすることとしました。

【2006年度　役員】（全て留任）

- ○会長／大舘　学
- ○副会長・運営委員長／真弓　浩二
- ○書記／近藤　眞史
- ○会計／村田　英二
- ○会計監査／小池　敦夫
- ○副運営委員長／永田　修二
- ○公園愛護会会長／近藤　眞史

総会後、まだ明るいうちから一ツ山の某所に場所を移し、有志で総会の第二部ということで、今後の活動について更なる討議をしました。こちらの活動も昼の活動に負けない程長時間やってしまいました。

シリーズ『森の住人たち』⑭
～ヒヨドリ（鵯）～
いまや都市の鳥の代表

ヒヨドリ科　　全長　27.5cm　　環境　全国の山地から低地・公園や住宅地など

ゆっくり散策をしていると、さっと私を追い抜くものがいた。ヒヨドリだ。２ｍ程前のハゼノキに止まったかと思うと、ひょいと首を左に傾けた。くちばしでアオムシをくわえて飲み込んだ。上を向いたと思えば、今度は首を伸ばしてまたアオムシをついばんだ。１匹、2匹、3匹・・・。とにかくすばやい。あっという間に12匹のアオムシを食べて飛び去った。その間おおよそ1分くらいだろうか。おみごと、拍手喝さいだ。

ヒヨドリは、「ヒーヨ、ヒーヨ」とか、「ピーヨ、ピーヨ」と鳴くことから名づけられた。体は灰褐色で頭から背中と喉は青灰色味がかった色をしている。翼や尾などは茶褐色。尾が長めで、波形を描いて飛ぶ姿は、遠くからでもやすい。

ヒヨドリは、かつては秋から冬にかけて都市部にやってきて冬を越す野鳥だった。春になると山野に戻って繁殖をしたものだという。雑食性と適応力で、今ではどこにでも住む。

探鳥会などでも、時折耳にする言葉がある。「なぁ～んだ、ヒヨか・・・」と。どこにでもいるので、珍しくも、なんともないからだ。ではヒヨドリのすべてを知っているかといえば、そうではない。私自身もアオムシをすばやく何匹も見つけて口に運ぶ光景に出会ったのは、初めてである。見慣れた鳥も、さらにじっくり見れば、発見が多く楽しいものだ。

（文責　　自然案内人　近藤　記巳子）